

機関番号：13801

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20510227

研究課題名（和文）中央アフリカ熱帯雨林における農耕文化の現代史に関する地域研究

研究課題名（英文）Contemporary History of Farming Cultures in Central Equatorial African Rainforests

研究代表者

小松 かおり (KOMATSU KAORI)

静岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：30334949

研究成果の概要（和文）：

中央アフリカの熱帯雨林地帯における農耕文化は、混作・焼畑移動耕作・根栽農耕・半栽培・生業複合といった特徴を維持しつつ、さまざまな新しい作物を取り入れながら現在に至っている。20世紀には、カカオやコーヒーといった樹木作物を導入し、土地利用と労働力利用を調整しながら現在の農耕文化を作り出した。当該地域の現在の農耕文化を、政策、市場経済、自然利用の変遷の中で位置づけることを試みた。

研究成果の概要（英文）：

The characteristics of the farming culture in Central Equatorial African rainforests include mixed-intercropping, shifting cultivation, vegetative crops, semi-domestication and multiple subsistence. They have accepted many new crops in their farming system. They introduced commercial tree crops including cacao and coffee in 20th century and adjusted their working pattern and land use system. I tried to rethink on the present farming culture in the area in relation to state policy, commercial economy and environmental use.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究代表者の専門分野：生態人類学

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：アフリカ・農耕文化・熱帯雨林・農業史

1. 研究開始当初の背景

アフリカでは、東アフリカを中心に、在来型

農耕文化の見直しや、ポリティカルエコロジー、情の経済論など、アフリカの小農の農業史と農耕文化についての研究が進んできた。しかし、

中央アフリカ熱帯雨林地帯においては、非集約型で生産性の低い農耕文化であると見なされ、少数の商品作物生産を除いて注目を集めなかった。また、1990年代以降に政情が不安定になった国が多いため、それまでコンゴ民主共和国（旧ザイール）などで進んでいた農学・農業経済学・生態人類学的調査の多くが中断され、さらに研究が停滞した。1993年から、京都大学を中心とした生態人類学のグループが政治的に安定していたカメルーンで狩猟採集民と農耕民を対象とした生態人類学的研究を進め、東部州・南部州における農耕文化に関する資料が集まった。筆者は、1993年以降、東部州において熱帯雨林の農耕文化と食文化に関する継続的な研究を行い、焼畑移動耕作・根栽農耕・混作を中心とする農耕文化と生業複合、食文化についての研究を進めてきた。当該地域の農耕文化は、熱帯雨林という自然環境を背景として、環境のコントロールを最小限にとどめ、自然の回復力を最大限に引き出す農耕文化が存在することを示してきた（小松・埜 2000）。

小松かおり・埜狼星、2000「許容される野生植物-カメルーン東南部熱帯雨林の混作文化」『エコソフィア』第6号、P.120-P.133

2. 研究の目的

上記のような特徴をもつ中央アフリカ熱帯雨林地域の農耕文化を、環境に対する適応・歴史/文化的な指向性・市場経済に対する適応・農業政策への対応の視点から歴史的に位置づけ直すことが本研究の目的である。特に植民地期と独立以降の政策への対応を中心に、20世紀の農耕文化史を地域社会の内外の変化から再構成することを目標とする。さらに、当該地域の農耕文化と食文化を、ルーツである西アフリカの熱帯雨林、作物を同じくするアジア・南アメリカの熱帯雨林の農耕文化と

比較して位置づけることが長期的な目標である。

3. 研究の方法

フィールドワークによる生態人類学的研究と文献調査による政策研究の組み合わせによる総合的な研究を目指した。

(1) フィールドワークによる生態人類学的研究

1993年より継続的に調査を進めているカメルーン東部州における現地調査。熱帯雨林の中に位置する村と、その母村であるサバンナと熱帯雨林の境界域の村において、聞き取りとGPSを用いた土地利用の歴史の再現と、商品作物栽培の歴史の聞き取りをおこなった。

(2) 文献による政策研究

カメルーン農業省において、1960年の独立後の数次にわたる農業政策10年プロジェクトの資料、国際熱帯農業研究所において、主食作物と商品作物の栽培史に関する資料、フランス・エクサンプロヴァンスの国立図書館で、植民地下における農業政策に関する資料、フランスとイギリスの書店で、熱帯農学と農業史、社会史に関する文献を収集した。

(3) 西アフリカにおける予備的調査

中央アフリカ熱帯雨林地帯の農耕文化のルーツである西アフリカの根栽農耕地帯で、中央アフリカの農耕文化と比較するための予備的調査をおこなった。ガーナにおいて、バナナの品種、栽培法、利用法、流通についての資料を収集した。

4. 研究成果

中央アフリカ熱帯雨林地帯の農耕は、数千年の歴史をもつ。その中で、当初の作物であったヤムイモに加えて、紀元前にバナナ、16世紀以降にキャッサバ、その後、ラッカセイやトウモ

ロコシを農耕システムの中に受け入れ、19世紀以降にカカオやコーヒーの樹木商品作物を取り入れた。

一方、基本的な農具は現在でも山刀と斧であり、混作を基本とし、森林の遷移を生かした焼畑移動耕作による土地利用など農耕の技術は継続している部分も多い。都市近郊では、人口の増加と土地の不足で焼畑移動耕作が常畑になり、化学肥料を用いることもあるが、地方では、自然の遷移などを利用した有機肥料で土地に養分を補給している。都市近郊では実質的に私有化されているが、地方では、村や集落単位の集団管理と個人による一時的な土地の利用権が有効である。また、野生植物の半栽培的利用といった、自然環境との緩やかな関係も維持している。

20世紀の農耕文化史は、焼畑移動耕作による自給用作物栽培に、樹木作物をどのように組み込んで、土地利用と労働力の配分を調整するかの歴史だったと言える。調査地で言えば、植民地下の1950年代にカカオの生産が始まり、1960年の独立以降、政府が苗の配付や農薬の配付、カカオの買い取りなどカカオ栽培を保護したため、順調に維持された。1990年代には、カカオ取引の自由化と国際価格の低下に伴い、一時、カカオ畑が放棄されたが、数年で価格が持ち直すと、放棄した畑に再度手を入れて収穫するなど、政策と価格を敏感に反映したカカオ畑の経営を行い、それを、食用作物の自給と販売が支えてきた。人口密度の低さと、土地の余剰により、そのような年ごとの調整が可能なのであるが、その背景には、管理を最小限に抑えて作物を維持する半栽培的農耕の技術と認識があると考えられる。カカオ栽培の限定要因は収穫期の労働力であるが、カメルーンでは、西アフリカと異なり、季節労働者や移民が労働を担うことがなく、世帯労働と隣接して居住するバカ・ピ

グミーの労働力によって労働力を賄ってきた。

近年のカカオの高価格によって、カカオ畑は拡大傾向にあり、土地利用の慣習法や国家の規制にも変化が起きている。また、これまでは限られてきた域外からの人間へのカカオ農地の賃借が広まり、生業の形態に影響を及ぼし始めている。さらに、近隣の土地の国立公園化と利用規制を緩和するため、政府による農民の共助組織の設立が奨励され、2010年には、これまでになかった養魚や畜産のプロジェクトが試みられようとしていた。

今後は、商品作物の生産のための土壌の劣化と森林の減少、野生動物保護のための狩猟の規制による生業複合の変化、外部の商人によるカカオやコーヒー農園の経営と労働形態や土地使用権の変化などが起こる可能性がある。

一方、ガーナでは、ヤムイモ、キャッサバ、バナナなど、中央アフリカと共通する材料を用いつつ、バリエーションに富み、手間をかけた調理法の発達と、それらの調理に合わせた中央アフリカとは異なる品種の選択が見られた。また、進んだインフラと都市化に伴い、主食作物の商品化が進んだ現状を観察することができた。

カメルーンでのフィールドワークによる商品作物史と土地利用の歴史の資料、ガーナのバナナ栽培文化に関する資料は、現在整理中である。また、日本語、英語の発表論文に加え、これまでに発表した論文を英訳または仏訳し、インフォーマントに還元する準備を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. Komatsu Kaori, Biodiversity of Intercropped Fields in Central Equatorial African Rainforests,

African Study Monographs, 32(3), 査読有、掲載決定済

(3) 連携研究者 ()

〔学会発表〕 (計 1 件)

1. 小松かおり、赤道アフリカにおける主食作物変容の条件と影響 - ヤム・バナナ・キャッサバ、日本アフリカ学会、2008年5月25日、龍谷大学

〔図書〕 (計 6 件)

1. 床呂郁哉・河合香織編、京都大学学術出版会、『もの人類学』、2011、小松かおり「ものと人の関係性の『あそび』-バナナと人間は依存しあっているか?」123-129 ページ。
2. 木村大治・北西功一編、京都大学学術出版会、『森棲みの生態誌 -アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』、2010、小松かおり「中部アフリカ熱帯雨林の農耕文化史」41-58 ページ。
3. 木村大治・北西功一編、京都大学学術出版会、『森棲みの生態誌 -アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』、2010、小松かおり「森と人が生み出す生物多様性」221-242 ページ。
4. 木村大治・北西功一編、京都大学学術出版会、『森棲みの社会誌 -アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 II』、2010、小松かおり「アフリカ熱帯林の社会 (1) -中部アフリカ農耕民の社会と近現代史-」3-20 ページ。
5. 山本紀夫編、国立民族学博物館、『ドメスティケーション - その民族生物学的研究』、2009、小松かおり「バナナの商品化と品種多様性 -インドネシア・南スラウェシの事例から」445-466 ページ。
6. 池谷和信ほか編、朝倉書店、『アフリカ II (朝倉世界地理講座-大地と人間の物語 12)』、2008、小松かおり「バナナとキャッサバ-赤道アフリカの主食史」548-562 ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小松 かおり (KOMATSU KAORI)
静岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：30334949

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

研究者番号：